

キュウリの摘心栽培に関する研究

第3報 促成栽培における茎葉の老化対策について

高橋英生・野間 史・岡迫義孝

(宮崎県総合農業試験場)

TAKAHASHI, H., NOMA, F. and OKASAKO, Y.

Studies on the Topping Culture of Cucumber Plants in Plastic-House

(3) On the Preventive measures to Senescence of Plants

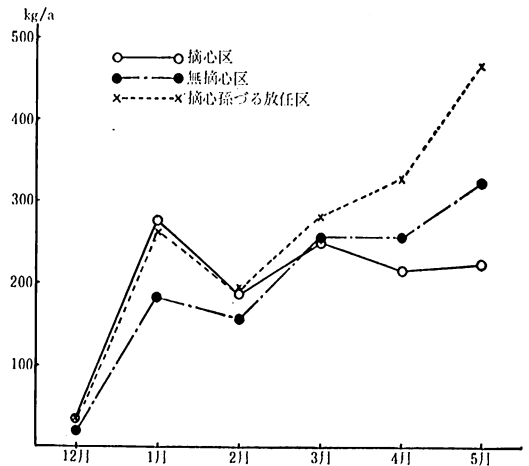
第2報で、促成栽培に摘心栽培法を導入した場合、慣行の無摘心栽培とほぼ同等の収量が得られ、前半の収量、品質は無摘心栽培より優れるが、一方後半は茎葉の老化が進み、収量、品質の低下が問題であることを述べた。この点については栽植密度、摘心節位などをかえることによっては解決できず、しかもこの点を解決しなければ大幅な増収は期待できない。このことのためには、品種の面でも検討する必要があるが、ここでは栽培法の面から検討した結果を述べる。

摘心栽培における茎葉の老化は、親づる、子づる、孫づると摘心をくり返すにつれて激しくなり、特に孫づるを摘心した時点で著しく進み、その後の側枝の発生がむずかしくなる。そのため収穫打ち切り時の茎葉重は、無摘心に比べ茎重、葉重ともに1/2程度にしか達しない。このような生育停滞、茎葉の老化を防ぐために、親づると子づるを摘心した後に発生する孫づるを伸びるにまかせ摘心しない整枝法(孫づる放任)を検討した結果、孫づるの伸長がよいために、後期まで草勢が保たれ、収穫打ち切り時の茎葉重は他の摘心栽培の2.7倍、無摘心栽培の1.4倍を示した。

収量については、栽培の前半は一般の摘心栽培と同様、無摘心栽培より高い収量、品質を示し、後半も無摘心栽培より高い収量が得られ、品質も良好であった。全期間の収量は無摘心、摘心区より総収量で約30%、上物収量では38%の増収が得られた。これは孫づるを伸びるにまかせたため若い葉が増加し、これに伴い根の伸長も盛んになって、株全体の老化が防がれたことと、着果率の低下はあったが孫づるの雌花数が著しく増加したためと考

えられる。

以上の結果、茎葉のこみすぎによる葉散、収穫などの作業面の問題、伸ばす孫づるの数の制限、摘葉その他、今後に検討の余地を残すが、長期型のキュウリ栽培に摘心栽培法を導入し、省力をはかりながら、同時に増収が期待される摘心孫づる放任の栽培法は、きわめて有利と考えられる。



第1図 月別収量

注) 摘心区: 親づるは18節摘心。子づる以後は2節で摘心。
 摘心孫づる放任区: 親づる、子づるは前者と同じ、孫づるは摘心せずに放任。
 無摘心区: 親づるは無摘心、子づるは2節で摘心。

第1表 茎葉の生育と収量および品質

処 理 区	収穫打ち切り時 (1株)		1株当たり側枝数		a 当たり総収量			a 当たり上物収量		
	茎重	葉重	子づる	孫づる	個数	重量	比	重量	比	上物率
摘 心	g 263	g 247	14.0	8.3	12,258	1,181	99.0	763	100.5	64.6
摘心孫づる放任	609	692	14.8	8.9	15,030	1,559	130.6	1,048	138.1	67.2
無 摘 心	548	432	10.6	0.2	11,400	1,193	100	759	100	63.6